

# 中国の大学生のキャリア成熟及び時間的展望に関する発達心理学的研究

学校教育学専攻

学校心理学コース

M09030D

王 建

## 問題と目的

Wofsey, Riedan & Wapner (1979)によれば、個体の計画状態は環境との距離から特徴付けられる。本研究では、中国の大学生を対象とし、Wofsey, Riedan, and Wapner (1979)と福井 (2008)の研究を踏まえながら、浜田 (1973)の個人と環境との距離化という視点から、自己と大学との関係性が、大学生のキャリア成熟態度とどのように関係しているのかという問題を焦点に当てる。そして、大学生の時間的展望にも着目し、過去、現在そして未来について中国人学生が日頃抱いている意識や態度は、自己と大学との関係性とどのような関係があるのかを検討する。

## 方法

研究参加者：中国海南省 A 大学に在籍する 223 名の大学生（2 年生 113 名、4 年生 110）が本研究に参加した。

調査時期：2009 年 9 月

材料：質問紙はフェイスシート（年齢、学年、性別）と竹内、坂柳（1999）の成人版キャリア成熟態度尺度、白井（1994）時間的展望体験尺度によって構成された。また、自分と大学との関係を絵と言葉で表すよう、自由記述を求めた。

手続き：質問紙が個別配られ、質問紙に対して回答するように求めた。

## 結果

(1) 描画の分類とその基準 Wofsey, Riedan, and Wapner (1979)と福井 (2008)の分類基準を参考にし、以下の分類基準を整理した。分類基準は以下の通りである。

Stage1 自己—大学間に距離化が見られず、未分化な自己—大学関係

Stage2: 大学と密接に関わりながら距離化し始めている自己—大学関係

Stage3: 個人—大学間に距離化と分化が進んで、段々遠くなっていく自己—大学関係

Stage4: 大学との間に客観的に距離が置かれて、統合的、道具的な自己—大学関係

描画分類の手続き：研究の目的を知らされていない 2 人の独立した評定者が以上の分類基準を用いて描画分類にあたった。

## (2) 描画分類の結果

学年別によって、自己—大学関係の各群間の人数の比率に有意な偏りがあるのかを確認するために  $\chi^2$  検定を行った。有意差 ( $\chi^2$

(3) = 8.064,  $p < .05$ ) が見られた。残差分析を行ったところ、stage2 においては 2 年生の方が 4 年生より比率が有意に多かった ( $p < .05$ )。stage3 においては 2 年生より 4 年生の方は比率が有意に多かった ( $p < .05$ )。

## (3) 自己—大学関係とキャリア成熟及び時間的展望との関係

自己—大学関係がキャリア成熟態度とどのような関係があるのかを検討するため、キャリア成熟尺度の合計得点及び各下位尺度の合計得点をそれぞれ従属変数とし、2 (性)

×4 (自己一大学関係群) の2要因分散分析を行った。キャリア成熟度の合計得点において、自己一大学関係の水準で主効果 ( $F_{(3, 215)} = 12.04, p < .001$ ) が見られたため多重比較を行った (tukey 法、1%水準で、以下同じ)。Stage 4 > Stage 1、Stage 2 > Stage 1であった。キャリア関心性において自己一大学関係に主効果 ( $F_{(3, 215)} = 9.26, p < .001$ ) が認められたため多重比較を行ったところ、Stage 4 > Stage 1であった。キャリア自律性において自己一大学関係の水準で主効果 ( $F_{(3, 215)} = 9.02, p < .001$ ) が認められたため多重比較を行ったところ、Stage 4 > Stage 1であった。キャリア計画性について、自己一大学関係の水準で主効果 ( $F_{(3, 215)} = 10.28, p < .001$ ) が認められたため多重比較を行ったところ、Stage 4 > Stage 1であった。

同じ方法で自己一大学関係が時間的展望との関係を検討した。未来志向性において、自己一大学関係の水準で主効果 ( $F_{(3, 215)} = 9.39, p < .001$ ) が見られたため多重比較を行ったところ、Stage 4 > Stage 1であった。過去受容において、性の有意な傾向が見られた ( $F_{(1, 215)} = 3.50, p < .10$ ) 男子群より女子群の方が高かった。現在充実感において、自己一大学関係の水準に主効果 ( $F_{(3, 215)} = 5.59, p < .001$ ) が見られた。多重比較を行ったところ、Stage 4 > Stage 3であった。

## 考 察

### (1) 自己一大学関係の描画分類

自己一大学関係に見られた距離化の傾向が、非卒業学年の2年生より、4年生に多く見られた。福井(2008)によれば、「4回生になって、就職活動を行い始め、卒業することをより現実的に考え始め、新しい世界への

期待と不安も抱いている」から、これまで「慣れ親しんだ大学」は「疎遠な存在」として、大学との間に心理的距離も大きくなると述べた。本研究はこの見解を支持したと考えられる。

### (2) 自己一大学関係とキャリア成熟態度及び時間的展望との関係

Wofsey, Rierdan, and Wapner (1979) によれば、大学が手段化、道具化されていた大学生の方が、大学との間に、より大きな距離を持っている。現在の自分を生き生きと感じながら将来展望を持ち、自分のキャリアに対して積極的な関心や自律的な態度もできていると考えられる。今の中国の大学生における職業意識の未熟や就職力低下傾向などの現象に見られるように、自分の未来に対して、目標や計画を持たず、毎日をただなんとなく過ごしている大学生には、大学から身を抜け出すことができず、大学としっかりと位置づけることができなくて、さらに、現在や将来の自分の位置を喪っているのではないかと考えられる。そのような学生に対して、注意深く見ていく必要性が示唆されている。これらのことから、大学生個々のキャリア発達様相の理解を深めることにより、より成熟したキャリア態度や適切な時間的展望を促進することに対応できるキャリア・カウンセリングの内容を充実することにも有意義であろう。さらに、これはひとり一人の勤労者のキャリア成熟態度や時間的展望を促進することに有効であれば、今の中国社会の就職難問題の解決にも大きく期待されていると考えられる。時間的展望において、男子より女子の方が、過去に対して、肯定的な態度を持つことが分かった。これは、白井(1989)の男子より女子の方が、過去を現在の自己の中に位置づけることができている、女子は過去親和主義であるという見解を支持するものと考えられる。

主任指導教員 浅川 潔司  
指導教員 浅川 潔司